

オバサンの

ズッコケお役所めぐり

高木 純子

幼にして人間は超能力を持ったものに憧れるらしく、息子も小さい時は、風呂敷を首に結び、月光假面のまねをして走りまわっていた。現在の私も超能力を持った浄水仮面でも現われて、さっと霞ヶ浦の水を浄化してもらいたい心境である。とにかく湖の汚れはひどいのである。

たまたま茨城放送の「主婦の日曜マイク」で水の問題をとりあげることになり、土浦市の水道部・公害課。下水道課と話を聞いて歩いた。すこしは明るい見通しでも思っていたのだが、いくら市民が叫んでみたとて、どうにもならないような重苦しい気分になって帰って来た。水道部は独立採算制をとっているが、起債などを国や市が援助しているの半分はお役所である。大へん親切な課長さんで、こちらの質問によく答えてくれた。

「霞ヶ浦は大へん汚れています、飲料水と適当なのでしようか」
「大丈夫です。」

「水質の検査はどのようにしているのですか」

「霞ヶ浦の水利権は国が持ち、県が管理し、浄水した水を土浦市が買っているの、湖の汚染に対してどう対処しているかわかりませんが、買った浄水は、検査して薬品を投入し、各家庭に送っています。そして月に二回市内の三か所で採水して検査し、それによって薬品を加えています」

「検査の結果はいかがでしようか」

「検査表がありますので」
と、検査表の綴じ込みを見せてくれた。バラバラとめくる。

「あら、不適合というのがありますね」

「検査は大へん厳重で、項目がたくさんありますのでその一つが不適合であっても実際に飲料水として差し支えないのです」

そう言われても何となく不安がある。それに月に二回は案外不適合の日も多いのではないだろうか。

「大へんこの噴水がかび臭いのですか」

「時期的に藻の開花時なのでどうしてもその匂いが強くなります。活性炭をずいぶん使っていますが、匂いをすっかり取り去るといわけにはいかないのです」
「飲料としてはさしつかえないのでしようか」